-209- 肝転移に関するシンチグラム所見と手術所見の比較検討

放医研病院部　○石川達雄
千葉県立佐原病院　外科
二宮　一，曽野文豊，岡田　正
小松崎　孜，林　良輔
帝京大学　放　筧　弘毅
千葉大　放　内山　暁
千葉大　二外　唐司則之

悪性腫瘍の肝転移の有無を適格に知る事は治療上重要な事であり、中でも外科治療の適応決定には、大きな因子となつている。今日この肝転移を知る方法に、シンチグラムが、有力な手段とされ、用いられているが、肝転移巣の大きさ、転移部位等により必ずしも正確な情報を得るに到つていない。そこで今回、我々は悪性腫瘍患者の肝シンチグラム所見を開腹時の肝所見と比較することにより、肝シンチグラムの診断能につき若干の検討を行つた。

千葉県立佐原病院に於いて、１９７５年４月より１９７６年３月迄に悪性腫瘍の診断で開腹手術を行つた症例は５８例で、その中１３例、２９％に肝転移を認め、更に１例の原発性肝癌を経験している。肝転移率の最も高いものは、大腸癌の３３％で、次いで、食道癌の１７％で、胃癌では１４％であつた。今回は、これら症例の中、術前に肝シンチグラムを行つた３８例について、シンチグラム所見と開腹時所見を比較検討した。放射性医薬品は、一部に^{99m}Tcを用いたが、大部分^{198}Auコロイドを使用した。装置は５インチ・シンチスキャナーである。

この３８例の中、肝転移の有無について、シンチグラム所見と開腹時所見とが、一致をみたものは、３０例であり、診断率は７９％であつた。両所見が一致しなかつたものは、８例となるが、この中、４例は、シンチグラムで、肝転移無しと判断したが、開腹時、肝転移を認めた症例であり、又、他の１例は、開腹時所見から肝癌と診断し得た症例であるが術前の肝シンチグラムで欠損を指摘し得なかつた症例である。更に、３例は、シンチグラムで肝転移を疑つたが、開腹時には、肝転移を認めなかつた症例である。この８例を中心にRetrospectiveに検討を行つたが、シンチグラム像で、肝転移を指摘出来なかつたものは、転移巣の大きさが１cm以下と小さいものあるいは、呼吸性移動により影響されるものであり、逆にシンチグラム像で読み過ぎの症例は、主に、右葉下縁の比較的大きな欠損であり、腎又は、大腸による圧痕が原因と思われた。

更に、両所見の一致した症例の検討も含め報告する。

-210- 転移性肝癌におけるＣＥＡと肝スキャンパターン

金大　核
○油野民雄，利波紀久，多田　明，
窪田昭男，久田欣一

（目的）転移性肝癌における血中ＣＥＡ測定に関しては従来よりその有用性が指摘されているが，今回肝転移の機会が比較的多い消化器癌を対象として肝シンチグラフイーとＣＥＡラジオイムノアッセイによる転移性肝癌に対する診断的有用性に関して対比検討すると共に，肝スキャン検出以前の血中ＣＥＡ測定による癌の早期肝転移検出の可能性の有無につき検索した。

（方法ならびに結果）種々の疾患３００例につきサンドイッチ法にて血中ＣＥＡ値を測定したが，血中ＣＥＡの高値は悪性疾患のadvanced stageで認められた。次に血中ＣＥＡ値より癌の肝転移の有無を評価するためfalse negativeとfalse positiveの和が最小となる5ng/mlを転移性肝癌に対する最低陽性基準として設置したが，大腸癌，胃癌，膵癌，胆道系癌計１２７例中5ng/ml以上の値を呈したのは４４例あり，そのうち肝転移例では４５例中３４例の７６％であつた。一方肝転移例４５例中肝シンチにて明瞭な欠損を呈したのは３３例，７３％であるが，肝シンチと血中ＣＥＡ値のいずれかにより肝転移が疑われたのは４５例中４１例の９１％であつた。肝スキャン欠損陰性で血中ＣＥＡが5ng/ml以上を呈した場合，真に肝転移が存在するか否かが問題となるが，肝転移陽性例では８例中４例で肝腫大像を呈したのに対し，肝転移陰性例で肝スキャン上肝腫大像を呈したのは１０例中僅かに１例のみであつた。また，肝スキャン欠損陽性例では，多発性欠損１４.２±９.１ng/ml（１９例），単一性欠損９.３±５.６ng/ml（１４例）と，単一欠損例に比し多発性欠損例ではあきらかなＣＥＡの増加傾向を呈した。

また，原発性肝癌では３５例中ＣＥＡが5ng/ml以上を呈したのは２例のみであつた。

（結論）今回の結果より血中ＣＥＡ測定は，肝シンチグラム上肝腫瘍が疑われた場合の質的診断法としてのみでなく，肝シンチ欠損検出以前の肝転移の有無の評価にも有用と思われる。特に，血中ＣＥＡが高値であり肝シンチグラム上肝腫大像を示せば，肝転移の疑い極めて濃厚と言えよう。

Presented by Medical*Online